

地理学における理論の再検討

The Reexamination of Theories in Geography

後 藤 雄 二*

Yuji GOTO

論文要旨

地理学の学問的性格を再検討し、それに基づいて地理学における理論化の問題を中心として論述した。はじめに、地理学は「空間的な認識の論理」であり、「空間的なものの見方」であることを述べた。次に、地理学は一般的には系統地理学と地誌学に分類されるが、これらの基盤として地理学基礎論をおき、その上に系統地理学と地誌学をおくという構造を示した。このような認識に立ち、フィードバック構造を基にして、理論的深化をはかる必要性を強調した。最後に、地理学の理論化には地域スケールの問題と、形態と機能の関係を明らかにすることの重要性について指摘した。

キーワード：地理学基礎論，フィードバック，地域スケール，形態と機能

1. はじめに

後藤(1995)は空間のゆがみの視点から、「従来おこなわれてきた研究を再検討することが必要」であり、「地理学の理論的発展の基礎として、距離、分布、空間などの概念の再定義・再検討をおこなうことが重要である」と述べた。本稿では、空間論の視点から「地理学固有の理論の構築と、それによる現象説明をめざす(杉浦, 1984)」ため、従来おこなわれてきた研究を再検討する試みのひとつとして、地理学の学問的性格と学問体系の中での位置づけについて論述することを目的とする。

そこで以下では、はじめに地理学の学問的性格と位置づけについて述べ、次に、地理学内部における理論的発展の条件について検討し、最後に地理学固有の方法について、上述した内容との関係を考慮しながら説明してゆく。

2. 地理学の学問的性格

地理学の学問体系の中における位置づけは、複合領域としてとらえられることが一般的である。これは、学問領域を分類するときには、その対象領域を基にしておこなわれていることが多いことに関係しているのであろう。地理学は、一般的には人文地理学、自然地理学、地誌学などに分類されており、対象領域が広範囲に関わっていることから、その講座が、ある大学で

* 弘前大学教育学部社会科学科教室

Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

は理学部に、また、ある大学では文学部などにおかれることから知られる。それは、地理学の学問的特質に対する認識と深く関わる問題である。

地理学においては、空間的視点、あるいは地域的視点はその特性としてあげられており、手塚（1991）は、これらを分布論、環境論、空間論、景観論、地域論に分類している。これらの中で筆者が重視するのは空間論であるが、これは、あらゆる対象について適用することが可能であると考ええる。研究対象とならないものは、空間的差異を生じない現象である。また、空間的相互作用を生じない現象についてもこれを対象とすることはできない。これらは後述する地域スケールの問題と深く関わることは言うまでもない。地理学の特質は上述した点に帰結するのである。このことを押し進めていくと、地理学の性質は、システムと同じように関係概念に基づき、研究方法による学問分野であるということができよう。

松田（1973）は「システムとは一つの認識の論理」、「システムとはものの見方」と述べている。同様に地理学も一つの空間的な認識の論理であり、空間的なものの見方であるということができるとはなからうか。対象により分類される学問分野ではなく、認識の論理、ものの見方とするのが、より適切なのである。そのため、歴史学、経済学、自然科学など様々な分野における空間的な現象にその方法を適用できることにもなる。これを実行するためには、応用範囲が広い理論の構築が必要であり、学際的研究の必要性も増大するのである。一方、地理学内部においても、学問体系を明確にした研究態度が重要となる。

3. 地理学内部の学問体系

前章の論をふまえて、あらためて地理学内部の学問体系について考察を加えてみる。地理学の分類は、一般的には、図1の右に示したように系統地理学と地誌学に分類される。系統地理

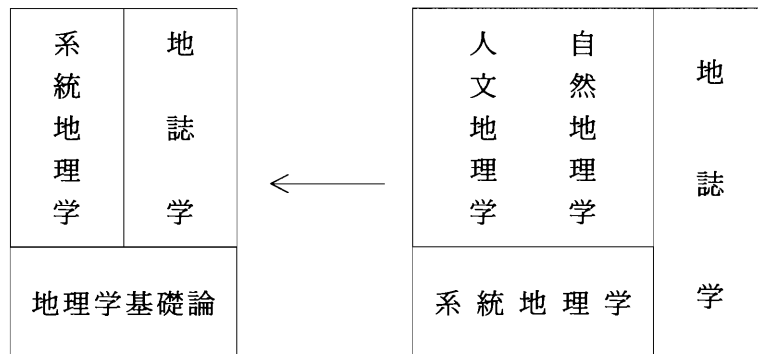


図1. 地理学の学問体系

学とは地形学、気候学などの自然地理学と都市地理学、村落地理学、人口地理学、工業地理学などの人文地理学である。また、地誌学は上述した地形、気候、都市、村落、人口、工業などの要素に満たされた具体的な地域を対象として、地域性や地域的相互関連とその要因を追求しようとするものである。一方、空間とは、対象と関係の弱い要素を捨象したものであり、地域とは異なる概念である。

地理学研究者が対象とするものには広範囲な内容が含まれるが、地域的・空間的視点という

点からは共通性が認められるのであり、地理学としてのまとまりが存在するのである。しかし、通常はこれらの共通部分については、従来の理論を踏襲しているのが現状であろう。つまり、地理学基礎論の部分には、かなり静態的な部分があると考えられる。

しかし、前章で述べたように地理学が「一つの空間的な認識の論理」であり、「空間的なものの見方」であるとすれば、地理学にはそれらの基礎としてのさらなる学問的追求が必要なのである。それぞれを個別におこなうのではなく、基礎的な研究をおこなった上で、それぞれの研究の深化がはかられるべきものであると考える。そこで筆者は地理学の学問体系を再構築していくことが重要であるとする。しかし、近年の傾向をみると、このような基礎的な部分が不足しているように思われる。

そこで図1の左にあるような図式を提案したい。これは、他の学問分野へも適用が可能である。このことによって、より理論化が進むといえる。そうするためには、地理学研究者によって、地理学基礎論に基づく理論を地理学の範囲を越えて、より一般化する必要がある。

ここでは、谷口集落の成立要因を例として説明する。谷口集落の事例としては関東平野の西縁、関東山地の東側に立地する中心集落をあげることができる。これは河川が山地から平地に流れ出す谷口に発達した地方核心集落のことで、地理学においては昭和初期から研究がおこなわれてきた。山地と平地という異なった生産活動がおこなわれていたため、両地域の接触地点に山地と平地の物産を交易するために発達したのである。八王子、青梅、寄居、沼田などがこの例としてあげられる。つまり境界地点に中心集落が生じるという理論である。

一般化のためには、用語の革新が求められる。地理学における中心地論やチューネンの理論は結節地域として一般化されている。これに結節構造という用語を用いることは、地理学の理論の適用範囲を広めることになるであろう。前述した谷口集落についても、地理学の術語からより一般化した名称、「境界中心点」、また、その特質を「境界中心性」という用語を用いることが、適用範囲を広げることになるのである。このような用語の変更は大きな意味をもっている。従来の地理学の用語の中で、一般化が可能なものについては、一般化が可能な用語への変更が必要であると筆者は考える。このような行為が地理学の側から必要になるのである。

では、具体的にはどのような方法によって、理論化を推し進めていくことができるのであろうか。図2は筆者の考えを模式化して示したものである。理論と応用とはある学問分野の中で、

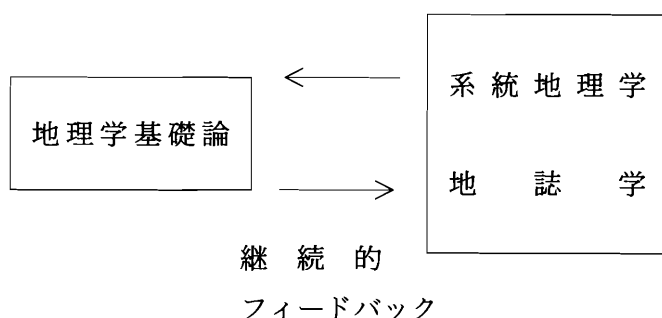


図2. 地理学基礎論と応用地理学の関係

それぞれが分離して存在するわけではなく、また、ひとりの研究者の中にも両者の考えが共存している。理論を深めることによって、応用が模索され、進歩し、それが地理学理論にフィードバックされて理論の構築・深化をうながすという構図が描かれよう。筆者の考えでは、地理学は地理学基礎論と応用地理学に大別できると考える。ここで応用地理学とは、従来の系統地理学と地誌学の双方を含むものである。このような考えには異論も多いと思うが、このように考えることによって、地理学における研究の方向性が明確になると考えるのである。

そこで、次に理論化の中でいくつかの重要な概念について、地理学基礎論の視点から再検討することにする。

4. 地理学における地域スケールと形態・機能

地理学における地域スケールの重要性については、浮田(1970)が次のように指摘している。地域スケールは地理学に固有の視点であり、「さまざまなスケールでとらえてみて、それらを比較検討することが重要で」としている。この視点を深めていくことが、地理学の理論化の基礎として必要欠くべからざる条件となる。

たとえば、地域的差異については、マクロスケールでは、それが見られないことがあるのに対して、ミクロスケールでは差異が明瞭な場合があるのは当然のことであろう。そのため地域スケールとしてどれを選択しているかが重要なのである。また、これらの考察には浮田も指摘しているように、当然、時間スケールも関連してくる。長い時間スケールでは変化がみられるのに対して、短いスケールでは変化はみられないことになるからである。以上のような概念を前提として、理論化を進めていくことが重要である。

次に筆者が述べたいのは、地域(より一般的には空間)スケールの階層性であり、クリスタル理論の適用範囲の広がりに関わるものである。また、香川(1987)の「高齢人口特化地区ならびに人口特別減少地区の地域的展開」のモデルでは、6県庁所在都市の規模の問題がある。これらはそれぞれ都市規模を異にするが、これらを同一のモデルで説明することが、はたして適切なのかという問題である。つまり、モデルの具体化の程度に関する点である。これをより一般化するとすれば、他の条件がすべて同一であると仮定した場合、日本で作成したモデルを世界全域に適応可能かどうかなどの問題もある。

この階層性と地域スケールの異なる現象のモデル化には解決しなければならない多くの問題点が予想されるが、ここではその重要性を指摘して課題としたい。

次に、空間構造の解釈に関して問題となるのは、形態と機能の関係である。これらについては景観論との関わりが従来より指摘され続けてきた。後藤(1981)では、家屋密度の地域区分から、城下の拡大を要因として、侍屋敷の敷地面積と、侍の階層との偏差を図化し、歴史的要因を検討したが、これは形態と機能の相互作用の結果と見なす。すなわち、この偏差の説明要因として、城郭という結節地域の中心からの距離と城下の拡大という時間の経過をもちいて説明を加えたのであるが、この地域的偏差の分布は、地域を構造的・動的に把握する方法と見なせる。この地域的偏差により、城下町における侍の居住パターンの特性と近世城下町の性格の説明を試みた。

地理学においては景観論を中心として、視覚的な現象を対象を限定し、それを基礎として地域の解釈をおこなう方法がとられてきた。しかし、形態的には同じに見えるものが機能的・内容的には異なることも多い。地理学においては、このような視点に基づく空間構造の解釈と説

明が多くおこなわれてきたように思われる。形態と機能を分離してそれぞれの特性と相互関係を研究することが、理論地理学の基礎として必要ではなかろうか。

6. まとめ

地理学の学問的性格を再検討し、その中で、地理学は「空間的な認識の論理」であり、「空間的なものの見方」であることを述べた。次に、地理学は一般的には系統地理学と地誌学に分類されるが、これらの基盤として地理学基礎論をおき、その上に系統地理学と地誌学をおくという構造を示した。このような認識に立ち、フィードバック構造を基にして、理論的深化をはかる必要性を強調した。最後に、地理学の理論化における地域スケールの重要性、および、形態と機能の関係について課題を示した。

参考文献

- 浮田典良 (1970) : 地理学における地域のスケール ―とくに農業地理学における―
人文地理22, 405-419
- 香川貴志 (1987) : 東北地方県庁所在都市内部における人口高齢化現象の地域的展開
人文地理39, 370-384
- 後藤雄二 (1981) : 17世紀の城下町仙台における侍の居住パターン 地理学評論54, 513-529
- 後藤雄二 (1995) : “実験地域”としての青森県における分布の類型化の試み
弘前大学教育学部紀要74, 1-8
- 杉浦芳夫 (1984) : 地理学における数理的手法の発達 地学雑誌93-7, 8-15
- 手塚 章 (1991) : 地理学の古典 古今書院, 422ページ
- 西川 治 (1996) : 地理学概論 朝倉書店, 268ページ
- 日本地誌研究所 (1973) : 地理学辞典 二宮書店, 889ページ
- 松田正一 (1973) : システムの話 日本経済新聞社, 196ページ

(1996.7.30受理)